

2019年8月25日～27日に開催された「自治労連第41回定期大会」（東京・江東区）での代議員発言です。

読まれる機関紙づくりで団結を深め 組合活動の活性化を

山口・下松市職労

執行部提案の運動方針に賛成する立場から、機関紙づくりを通じた単組・職場の活性化について発言させていただきます。本題に入る前に、昨日の昼休みですが、第21回自治労連機関紙コンクールにおいて、下松(くだまつ)市職労が作成する機関紙『こだま』が、市町村職部門で最優秀賞を受賞させていただきました。本当にうれしいので、ここで大いに喜んでおきたいと思います。みなさん、ありがとうございました。

さて、この機関紙『こだま』について少し紹介させてください。創刊1966年11月29日で、今年で53歳を迎えます。ずっと受け継がれてきた『こだま』ですが、大きな3つの柱というべき特徴があります。それは「毎日、手書きで、みんなで編集」という特徴です。1つ目、『こだま』は毎日作成しています。今年7月に1万2000号に到達し、その翌日には、もちろん1万2001号が発刊されました。毎日書くことで、当然ネタに困ります。ですが、団体交渉を行った翌日には、必ず交渉の結果を『こだま』に載せています。「継続は力なり」と言いますが、まさに『こだま』は団結の力の源になっています。

2つ目、手書きにこだわり続けています。

あえて選択する、アナログで非効率極まりない「手書き」での作業。もう1万2000号も書いているわけですから、止めるに止められません。というのは冗談で、これは紙面の見た目にその理由があります。手書きなのでレイアウトに制限がありません。何よりも紙面に温かみがあり、親しみがわきます。これからも、あえて「手書き」にこだわり続けていきます。

3つ目、編集体制についてです。会場のみみなさんの単組・組織が発行している機関紙は、だれが書いていますでしょうか？『こだま』は執行部・書記だけでなく、若手組合員も編集に参加しています。体制が月曜日から金曜日まで、曜日ごとに計5班を作り、各曜日ごとに編集にあたっています。各班およそ10名程度です。退庁後、書記局に集まり、書き始めます。「記事のここは私が書こう」「私は絵が得意だから、カットを描きます」など、自然と分担ができます。体制が執行部だけに限られていないことが『こだま』の大きな特徴です。

以上、3つの柱を述べさせていただきましたが、私は自慢話をしに来たわけではありません。機関紙づくりは、組合、職場の活性化

に大いに寄与するんだ、つながっていくんだということを、今日会場にお集まりのみなさんと共通の認識として確認したいと思います。『こだま』を例にとると、それが良くわかります。先ほど『こだま』は若手組合員も編集に参加すると説明しました。退庁後、いろいろな職場、出先の職場からも集まります。そうすると、もうそれだけで「しゃべり場」ができます。わいわい、がやがやと話すことで組合員同士の交流が生まれます。人が集まると仕事の円満化につながり、組合・職場の活性化につながっていくのです。

また、「こだまコンクール」というイベントも年2回実施し続けています。曜日ごとの班が作る『こだま』について、どの班の紙面が最も優れているか競い合うのです。採点はその都度選ばれた5名の組合員が審査員となって行いますが、そこに加えて、全組合員からの人気投票も行い、ボーナスポイントとして採点に加わる仕組みになっています。編集委員を卒業した組合員にも『こだま』をより身近に感じてもらえるとりくみといえるでしょうし、何より、組合活動に参加していると実感してもらえる「仕掛け」にもなっています。

このほかに、年1回の班体制の見直しの前には、かならず「こだま学習会」を開催し、新入組合員を加えた編集委員全員で、編集技術について学ぶ機会を設けています。今年は先週実施しました。学習会の後にはもちろん懇親会も行い、交流を深めています。

ところで、機関紙はいくら組合の主張が正しく、しっかりと書いていても、組合員に読んでもらえないと意味がありません。『こだま』は記事のバランスにも気を付けて、組合員の目に留まるようにしています。一点だけふれると「人に関する記事を写真入りで載せる」

と、その紙面は読まれます。そうした工夫で機関紙を手にとってもらえるようになると、例えば交渉の結果について書いた紙面に対し、意見が出るようになります。執行部は、組合員の生の声を取り上げて、次の交渉で当局にぶつけます。その結果をさらにまた紙面に落とし込む。発言の冒頭で『こだま』は下松市職労の「団結の力の源」と表現しましたが、まさに機関紙づくりを通して団結が深まっていくのです。

各単組・地方組織が置かれている現状は千差万別ですが、それぞれで作成されている機関紙にも、そういった力が秘められているし、実際に団結の源になっていると実感されている方も多いのではないのでしょうか。これからも機関紙づくりを通して単組・職場の活性化に、みなさんと一緒に取り組んでいきたいと考えています。ともにがんばりましょう。